

# エデンの園と悪人正機——悪を知る者が悪に向って立ち上がる

Greatchain  
2019/03/30

いわゆる whistleblower (警世家) たち、特に毎日のようにビデオで喋っているデイヴィド・ウィルコックのような人たちの話を聞いていると、徐々にわかってくることもある。陰謀団を倒そうと、Q に代表されるように、ひそかに立ち上がっている人々がいる。単に The Alliance (同盟) と呼ばれる集団のこの人たちは、いわゆる「善人」ではない、人に言えないような過去をもつ人たちばかりだ、とウィルコックが言ったとき、私だけでなく、聞いている人はみなハッとしたと思う。彼はそのとき 2 人の実名をあげた。

今、我々の前に現れてきた悪は、中途半端な悪ではない。これ以上の悪は考えられない悪そのものである。その頂点にいる実在する悪魔は、**宇宙**を乗っ取ろうとする者である。(これもウィルコックから聞いたばかりだ。私は、**地球**を乗っ取ろうとする者だと考えていた。) 彼らは神をよく知っていて、その神に反逆しようとする者である。では、その者を倒すにはどうすればよいか？ 当然、相手をよく知っていなければならない。すなわち、究極の悪がどういうものであるかを知っている者でなければ、戦うことはできない。親鸞が明らかに「善人」を軽視して、「悪人」こそ自他を救う中心になる者だと言ったとき (悪人正機説)、彼の心底にあったのも、同じことではないだろうか？ そんな解釈は考えすぎだ、間違いだと言う人がいるかもしれない。しかしそういう**方向**に解釈すべきであろう。

「善人」と言われる人は、同じ人間にそこまでやれるはずはない、と言うだろう。それが善人たるゆえんである。しかしそれは、事実を知らぬだけでなく、悪と戦う資格の全くない者たちである。そこで、先日ここに書いた (3/14) 「この真実はあなたを怖がらせるかもしれない——〈善と悪の知識の木〉とは何か？」を思い出していただきたい。要約すればこう言うことである：——エデンの園にあった「善と悪の知識の木」の話は、実にあいまいで矛盾している。そもそもこれは、悪魔 (蛇) が、神の禁止令に反論するために、つまり人間を騙そうとして、つけた名前ではない。神自身が「善と悪の知識の木」から取って食うな、と言っている。これはどう読んでも「禁断の木の実」の意味にはならない。「善悪の分別ができ、目が開かれ、賢くなれる木の実」の意味であろう。グレアム・ハンコックは、それを食べた

人間は「生命の木」をも食べるだろうから、そうなったら彼らは、「我々神々のようになるだろう」と神は（懸念して）言った、と言っている（そういう版があるのだろう）。

これは一体どういうことなのか？ 神は我々を、一切の悪に触れさせない（悪の DNA の入らない）エデンの園に、「箱入り娘」のように囲い込み、大事に保護する予定だったのだろうか？ それは神の愛から出た有難い配慮だったに違いない。しかし今、これまで知らなかった人類初めての知識が与えられてみると、この神の配慮が有難かったのかどうか、疑問が湧いてくる。確かに我々はこの激動期に死ぬかもしれない。しかし、この恐ろしい時期を、現実を知ることによって乗り越えなければ、「神々のように目が開かれる」ことはないとしたら、どうなのか？ しかも、人間は（個人的にも人類としても）そのような激動の節々を乗り越えて、「神に近づく」ようになっているのだとしたら、どうなのか？

そう考えると、「善と悪の知識」とは、「善悪の分別をわきまえる」ことではなく、「この世界は善と悪、神と悪魔に分かれて争っている現状を知る」という意味にしかならない。そのように解釈してこそ、我々は悪と戦うことができる。我々は善人でも、悪の極限を知った善人でなければならない。親鸞のいわゆる「善人」や、エデンの園の無知の善人であってはならない。創世記の神が、この忠告について、躊躇し、かつ矛盾しているように見えるのも、悪魔が、別にウソをついているのでないわけも、そこから考えなければならない。

奇妙なことに、現在の主流メディアは、我々にエデンの園を与えようとした神に似ている。我々は主流メディアのおかげで、世界の恐ろしい真実を知らされず、これが世界で起こっているすべてだと思って「幸福に」生きている。もしこのまま何も知らずに眠り込み、すべてが終わってから目を覚ますことができれば、我々は、主流メディアの「配慮」に、感謝しなければならない。我々は子供の強姦殺人や、イエメンなどで起こっている、いわば子供のなま殺しの現実を、聞きたくはない。この凄惨な事実は誇張ではない。サタンは、我々人間から発する、恐怖、苦痛、悲しみ、不安、トラウマ、絶望といったマイナス・エネルギーを糧として生きているのだという。このエネルギーは loosh と呼ばれ、子供が loose を発音したような名の霊的物質で、これが地上に蓄積することを、彼らは喜ぶのだという（D・ウィルコック）。

それだけではない。彼らの人間支配の手段は、すべてプロパガンダ、巧妙なウソや騙しであって、これによって人間どもを徹底的に墮落させる。現在これは、米民主党に託されている。今、この途方もないニュースを抜きに報道はできないので、新聞はほとんど報道をやめてしまった。そこで今聞こえてくる朗報は、サタン側のグループの中から、次々と「英雄」が立ち上がっていることだという。彼らは、もうこれ以上、こういったニュースに付き合うことが、できなくなってしまった。そこで外部の正義の味方でなく、内部の事情を知っている者

たちが、耐えられなくなって飛び出し、「連盟」に加わっているのだという。このことは、「悪いのはアイツラ」という考え方が、間違いであることを証明する。悪いのは、このような文化を作り出した、我々全体であり、それが、この文化自体に飽きあきしているのである。それに呼応するのが、我々「善人」の役目でなければならない。それは自己改革であって、敵の改革ではない。復讐を解決とは考えない。それは徹底させることによって突き抜けさせる、「神は曲がった線を用いてまっすぐに書く」という神の作戦とも考えられる。

もう一つ、イルミナティ教団のルシファー信仰について、ウィルコックの語るその成立の経緯を通じて、ほぼ確実にわかってきたと思えることがある。それは「デイヴィッド・ウィルコックの語る陰謀団の没落」(3/21)の終わりから4-3段目にある：――

…あなたが30階級および31階級に達すると、彼らの組織の目標は、宗教の蛇の頭を潰すことだと言われる。ところで、確かに、組織化された宗教は多くの問題を引き起こしているが、彼らが意味する本当のところは、すべての宗教を排除せよということではない。彼らはそれを望みはするが、彼らの宗教が地上に存在していればよい。ただ、もしあなたが彼らの宗教を許さないというなら、あなたは殺されるということである。

これは、彼らのアジェンダには、共産主義と同じく、宗教の撲滅ということがあるが、すべての宗教でなく特にキリスト教だと言われることに関して、ウィルコックが、ルシファー教徒自身から聞いたものと思われる。しかしキリスト教と言っても、そのすべてではないだろう。特に、彼らのご本尊であるルシファーを「許さない」と言っているのは、前世紀の末期、非常に激しい攻撃を、あらゆるメディアから一斉に受けた、ある新宗教しかない。メディアを支配する彼らにとって、これは易しいことだった。これは前から推測できたことだったが、このウィルコックの調査によって明らかになった。ところで、私の見るところ、この新宗教は今、ルシファーを許さないどころか、ちょうど「エデンの園」のように、「善人」たちの善良な組織になっている。